学術情報リテラシー教育の理論と動向（講義骨子）

野末俊比古

１．はじめに

・研修の目的・構成

・講義の目的・構成

２．メディアの多様化・高度化と情報の利用（者）

・メディアをめぐる変化（インターネットの意味するもの）

　　情報通信技術の高度化（デジタル化・ネットワーク化）

　　情報源と情報流通経路の多様化

・「情報」利用者の変化と図書館

　　情報探索・利用行動（方法）の多様化・高度化

　　図書館の位置づけの変化

　　図書館の（新たな）役割・対応

３．情報リテラシー（教育）の研究・実践・政策の動向

・情報リテラシー（概念）の変遷

　　70 年代：　ビジネス能力

　　80 年代：　日常生活全般

　　90 年代：「教育」に焦点

　　00 年代：　デジタルデバイドの解消

・情報リテラシーの今日的な理解

　　情報を主体的に使いこなす能力

　　定義（中身）は分野や文脈に依存

　　一種のスローガンとして機能

　　スキル（技能）の側面が強調

　　類縁概念との区別は曖昧

　　「図書館リテラシー」も（重要な）要素

・最近の研究動向（例）

　　レビュー研究（国内）の登場

　　大規模な実態調査の実施・公開

　　実践に基づく報告・考察

理論的・歴史的な分析・検討

・最近の実践動向（例）

導入教育（初年次教育）

出張（出前）講座

教材・ツール作成： テキスト、パスファインダ、ウェブ、…

・最近の政策動向（例）

ＩＴ基本法

学術審議会建議、科学技術・学術審議会報告など

４．高校までの「情報教育」の現状（教科「情報」を中心に）

・学校教育における情報教育

情報活用能力の育成： 生きる力（課題解決能力）として

情報活用能力の要素（焦点）： 情報活用の実践力、情報の科学的な理解、情報社会に参画する態度

教育環境の整備：「e-Japan 戦略」「ＩＴ新改革戦略」など

・「情報教育」の体系化のイメージ（資料Ｂ）

・普通教科「情報」の概要

目標： 情報化の進展に主体的に対応できる能力・態度の育成

構成：「情報 A」「情報 B」「情報 C」から 1 科目以上必修

特徴：「問題解決」が基礎、文理融合型、実習（技能）重視、…

５．大学図書館における学術情報リテラシー教育（指導サービス）の展開

・大学図書館の「利用者教育」

「図書館」「資料」→「情報」

「探索・収集」＋「整理・分析」「表現・発信」

「図書館（員）」＋「図書館以外（授業・教員など）」

・「指導サービス」の意義

図書館の「内部」から「外部」の文脈へ（体系的な情報リテラシー教育）

「利用者」の視点を重視

図書館経営・政策上の「戦略」

これまでのサービスの体系化・再構築

・各館における指導サービスの展開

「逐次的」「個別的」「単発的」→「体系的」「計画的」「組織的」

これまでの活動（サービス）の再構築（体系化）

・企画・実施にあたって①： 指導サービスの意義・内容（目標）

必要性（目的）： 図書館の使命など、利用者のニーズなど、...

有効性（評価）： 効果、効率、...

・企画・実施にあたって②： 指導サービスの対象

利用者層の把握・分析

プロフィルの作成、...

・企画・実施にあたって③： 指導サービスの方法（手法）

直接（対面）／間接（遠隔）

同期・非同期

集合（集団）／個別（個人）

ツール（メディア）の活用

・企画・実施にあたって④： 指導サービスの手順など

指導の順序（段階）

授業との関連： 関連なし／学科関連指導／学科統合指導／独立学科目

・「指導サービス」の指針など

米国： ACRL の指針・基準など

日本： JLA の指針など

「たたき台」や「拠りどころ」として

・さまざまな課題（例）： プログラムのマネジメント

指導の内容・方法などの体系化・標準化・共有化

さまざまな利用者（ニーズ）への対応

環境（施設設備・予算・人員など）の整備・確保

学内での位置づけ（教員・授業との関係）

職員の「指導」技能（養成・研修）

６．おわりに

・大学コミュニティにおける位置づけ（ライブラリアイデンティティ）

・図書館員の役割（専門性）